



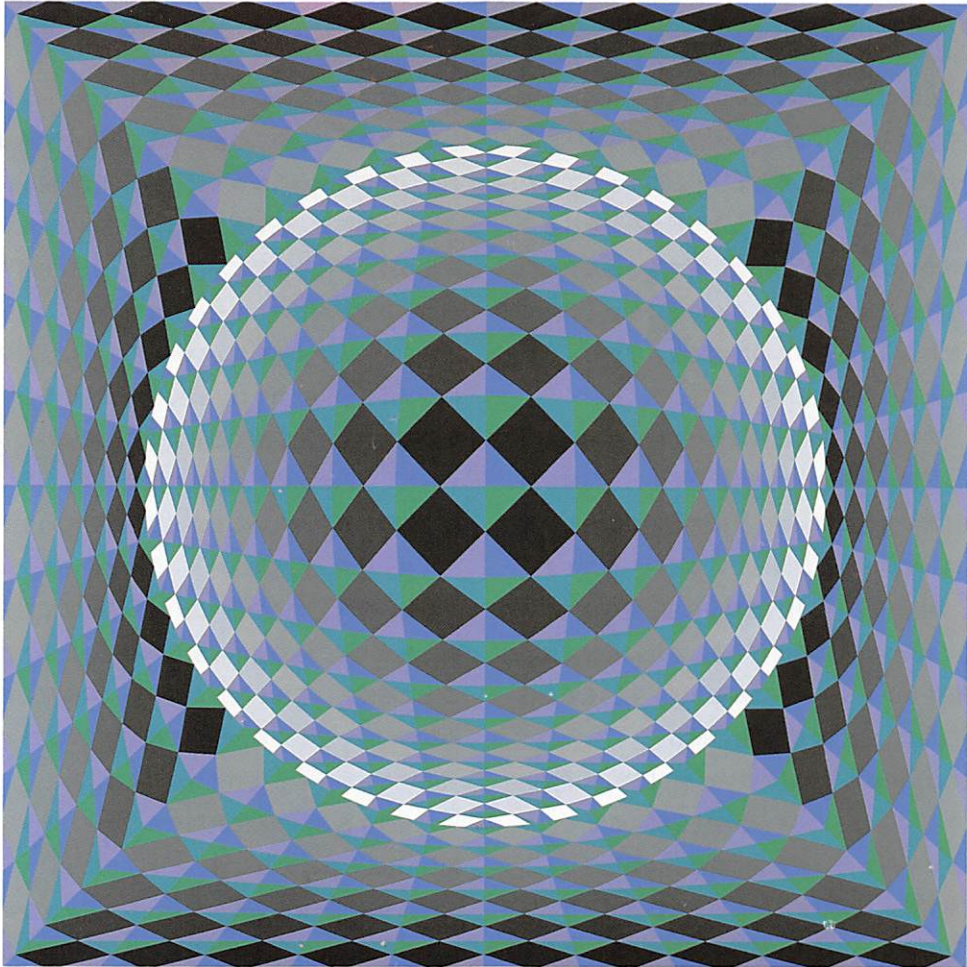
会 報

第16号

平成2年2月

社団法人 北海道美術館協力会

札幌市中央区北1条西17丁目 電話011-644-4025



北海道立近代美術館蔵

新収蔵品紹介 ヴィクトル・ヴァザルリ「ATHMOS」

ヴィクトル・ヴァザルリは、錯視の効果をも
ブ・アートのパイオニア的な画家。1908年ハンガリー
に生まれ、ブダペスト・バウハウスに学んだのち、
1940年代後半から抽象絵画の制作にとりくんだ。以
来一貫して、幾何学的形態の連続・反復や色彩の対
比がもたらす視覚的な効果を追求している。この作

品もそうした作風をよく示す1点であり、タイトル
には〈大気の振動〉という意味がある。知的で巧み
な構成によって、画面中央部が膨張してくるよう
な、ダイナミックな運動のイリュージョンが生み出
されている。

今、思うこと

北海道教育庁生涯学習部長 前田利明



もう何年も前のことになりますが、高校時代の担任であったK先生が、よく「これからの自分自身の人生を豊かに過ごすために“一芸に秀でよ”」と口にされていたことを思い出します。考えてみると当時はその意味することが理解できないままに、一芸に秀でることなど相当の才能がなければ身につけられるものではないと考えておりましたから半ばあきらめの境地で聞きながしてきた言葉であったように思います。

つい最近の新聞に“一芸社員こそわが社の活力”という見出しの記事がありました。今、企業では、将来の新規事業や経営多角化に備えて、社員の適正や能力を情報として蓄積している会社が増えているというものです。A社では、個性発見という社内資料を作成、趣味やスポーツの名人、オモシロ人間を紹介する。また、B社では、趣味、特技をコンピューターに蓄積している、その趣味や特技の項目数は合計で126にもものぼる。

スポーツはプロ級かアマ級かのレベルも聞く、「司会」「カラオケ」「コント」といった特技を記入させて、カラオケのうまい付き合い上手を営業担当に異動させるといった人事情報にも活用する、といった内容でした。

このことを書いたのは、仕事に生かそうと思ったからではなく“一芸”とは、なんと巾の広いことか、さて自分がB社の社員であったらなにを書くか、と考えたからです。今年は、21世紀へあと10年という年。

これからの社会は高齢化、情報化、国際化がより進展するといわれますが、どんな速さで進行するのでしょうか。アメリカの未来学者でもあるアルビン・トフラーの著「第三の波」によると、地球は今新しい文明の引く波と寄せる波の激しいぶつかり合いの中にあるのだといい、

第一の波である農業革命は、数千年にわたってゆるやかに展開されたが、第二の波である工業化の変革は、わずか3百年しかかからなかった。第三の波の情報化はせいぜい2・30年で完成するだろう、と述べています。社会変化の波は、仕事の面ばかりでなく、社会生活や家庭生活のすみずみまでおし寄せています。

とくに、人生80年時代といわれるように、寿命が大巾に延びた高齢化社会では、長くなった人生を張りのあるものにし、より充実して送るために生涯にわたって自から学習し、絶えず新しい技術や知識を身につけて、社会変化に取り残されないことが必要になっています。

スポーツや文化活動、ボランティアやリクリエーション活動、趣味、娯楽など幅広い活動を通じて自分自身の向上をめざす、活動自体に楽しみを見いだす、こうしたことに積極的に参加していかなければならない時代、こんな時代に一芸どころか無芸、無趣味では、これからの人生いささか心もとない感じがします。

大人の学習者が増えて民間のカルチャーセンターには約140万人もの人が通っているとききます。

趣味やスポーツも盛んになり、ボランティア活動もかつての一方通交的な奉仕の考え方から、活動を通しておたがいが学び合うものへと大きく変わっているといわれております。

「時間がない」「暇がない」から抜けだしてもっと積極的に学習活動に参加しよう、活動を通して、今からでもおそくない「50の手習い」よろしくなんでもよい一芸を身につけよう、これからの人生を豊かに過ごすためにも、と考えるこの頃です。

第10回晩秋の東欧の風景と 美術館めぐりの旅

1989. 10. 19~11. 02 (15日間) 理事(団長) 小杉 八千代
参加者45名



訪れる美術館への武井会長のメッセージを携えて、ロンドン、フランクフルト経由で西ベルリンに着いたのは翌日の午後。時差は8時間。菩提樹の並木が黄色の葉を落していた。バロック式のシャルロッテンブルグ宮殿。カイザーウिल्ヘルム記念教会。戦勝記念塔等を見学。カラーペイントの落書1杯のベルリンの壁には強い印象を受けた。夕刻大分待たされて国境の検問所から東ベルリンに入る。翌日は森鴎外記念館やベルガモン博物館の復元された美事な神殿、国立美術館、ボーデ博物館、又ポツダム側のロココ様式の壮麗なサンスーシー宮殿。ブランデンブルグ門の見学。こちら側の壁は白かった。

国際見本市やバッハ、ゲーテで有名なライプチヒへ。街中の伝統ある建物は駅、市庁舎、大学、記念塔にしても文化的雰囲気を感じ息をのむ素晴らしさがあった。

途中有名な国立マイセン陶磁器工場に立寄ったが生憎休日で残念だった。エルベ川が近く小高い丘の上に中世からの城や大聖堂が聳える落ちついた町であった。

ドレスデンも文化都市。戦禍にあい乍ら中世から近世にかけての美術・音楽。建築等の復興発展はめざましいときいた。アルトマルクト美術館は美しいツヴェンガー宮殿の中にあり、ルネッサンスからロココに至る名作がある。宝物殿やバロック様式の夏の離宮、ビルニッツ宮殿も素晴らしい。

国境の検問所を通過しチェコスロバキアの首都ブラハに。比処は大戦の被害を免れ旧市庁舎の時計塔等中世以降の古い建物が残る素晴らしい文化の中心地でもある。ブルタバ川を狭み右岸のブラハ城には国立美術館、絵画館、聖堂等みるものが多い。カレル橋は有名で30の聖者像が両側に並び立ち橋上からの眺めもすばらしい。その夜は国立オペラ劇場でソ連のオペラを鑑賞。感激一入であった。

翌日の夜やはりバスでオーストリアのウィーンに入る。音楽の都。ハプスブルグ家の王都。美術館や博物館の数

1650以上はあるときく。パリと並んで日本人もよく訪れるよい町である。ベルヴェデーレ上下宮殿。アルベルティナ美術館は質量共にさすが美事である。1日の滞在で残念。夜は公園のプラータに乗ったり、丘の上の居酒屋でワインをたのしんだ。

早朝の列車で私共はすっかり収穫の終わった農場風景を見ながらハンガリーのブダペストへ。ドナウ川に沿うこの首都も過去現在の歴史や文化が美事に調和した洗練された町である。国立ブダペスト美術館では館長代理のピーターフーバイ氏がお迎え下さって記念撮影。工芸美術館も興味深く鑑賞。ゲレルトの丘ではブダの王宮、漁夫の砦。マーチャーシ教会等見学。景色も素晴らしい。

愈々東欧に別れ空路パリへ。1986年開館の印象派の作品等の多い大きなオルセー美術館其他、郊外のバルビゾンを訪れたり各自が自由に過す。出発の日は「諸聖人の日」で休日、雨。

石の文化と歴史。音楽。美術。建造物、美事な宮殿聖堂等の遺産。戦禍をくぐりながらも何と人々はこれ等のものを大切に守り続けて来たのだろう。田舎の何処迄も続く凹凸の古い石畳の道。ワインやビール。英語のガイドさん……………帰宅早々、起き始めた思いもよらなかった政変も夢の様。けれど今一度是非共訪れてみたい思いにかられる楽しい得難い旅だった。



東欧に美を訪ねる

浦田 久



昨年10月19日。北海道美術館協力会のメンバー40余名は、豪雨の降りしきる成田空港を出発。ロンドン等を経由して西ベルリンに向った。時差8時間。西ベルリンは晩秋とも思えぬ暖かさであった。早速バスでベルリンの壁、ブランデンブルグ門等を訪ねる。異様な緊張感と非情な歴史の抑圧を肌で感じる。(帰国して数日後、この壁の貫通する歴史的な瞬間をTVで見て、感慨深いものがあった) 次いで夜の東ベルリン市内に入る。街中の暗さ、立ち並ぶアパート群の窓のあかりの少なさに押し詰った国内事情が窺えた。翌日は市内を見てからペルガモン博物館に行く。規模の大きさ、展示物の素晴らしさに見とれる。午後はポツダムのサンサーシ宮殿を見学。爛熟した宮殿建築の粋を見た。彼方の森に沈む夕陽が宮殿の黄金色の壁に映え、東欧へ来たことを実感する。翌日はライプチヒに移動。車内に流れるバッハの旋律と限りなく広がる晩秋の沃野を楽しむうちに到着。早速美術館に案内される。W・トウブケという画家のエネルギー溢る個展が開かれていた。続いてバッハの彫像のある聖トーマス教会と、バッハミュージアムを見る。教会内に流れるパイプオルガンの響き、ステンドグラスを透して晩秋の日射しがさしこみ、壁に飾られた青銅の彫像と共に壮嚴な宗教的雰囲気を感じさせられる。次に陶器で著名なマイセンを経由してドレスデンへ行く。この街は第二次大戦中、連合軍の無差別爆撃で破壊され、今もその跡が当時の惨状の俚残されていた。ここではツィンガー宮殿やカソリックコート教会、宝石博物館を見る。

王制権力の強大さと、宗教の偉大さを歴史の深さと共に知らされる。翌日は市内の美術館をめぐる。巨大な宗教画が展示されている美術館の地下に、最新のポップアートが展示され、若い人達が集っている対比が面白かった。

次にチェコスロバキアのプラハへ行く。プラハ城、聖ビート大聖堂を見る。カレル橋では水鳥が飛びかい、沢山の観光客と共にひとときの旅情を楽しむ。国立美術館では、セザンヌを始め数々の秀作が極めて無造作に展示されており、いかにも欧州美術界の底力を感じさせられる。晩秋のプラハの風情は忘れ難い印象を与えてくれた。そしてウィーンに移動。黄金色の陽光に映えるウィーンは美しく、さんざめいていた。シェンブルン宮殿や美術史博物館などを見る。長い変転と文化の歴史を感じさせる壮大な空間に、数多くの名作が展示されていて、私達はひたすらに眼をすえて至上の楽しみを味合った。

夜は大観覧車、水上レストランで古都ウィーンの香りを味合う。旅は最終コースに入り、列車でブタペストに移動。ここは1週間前に共産社会主義から共和国制へと変革したばかりで、街は煤煙でいささか汚れていたが、通りに溢れる人々の姿には活気が見受けられた。漁夫の砦、歴史博物館などを訪ねる。国立美術館では館長からご挨拶も頂く。キグリーチュ氏という、日本語の巧いガイドの誠実な説明で、ハンガリーの歴史と現状を改めて知らされる。そして旅の最後はバリ。自由行動でゆったりとそれぞれの目的に合った観光を楽しむ。私はオルセー美術館を終日鑑賞する。豊富な近代美術の傑作群にこの上ない眼福を覚えた。かくして私達の日程はすべて終り、11月2日、全員無事帰国する。旅を終えて思うことは、東欧の相次ぐ民主化という、歴史に残る大変革のうねりを実感しつつ、幾多の名作・傑作に接し、深い歴史を秘める東欧の古都の雰囲気を味わうという、幾重にも意義ある旅となり、私にとっても生涯忘れられぬ思い出を刻むことが出来た。ここに関係者の皆様に、心からの御礼を申し述べ、東欧探訪の概要を終えることとする。

東ドイツの二つの面

西尾 圓 壽



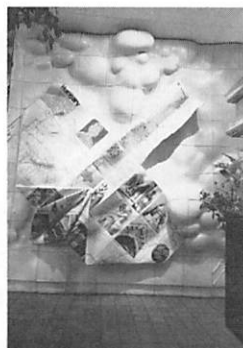
わずかの間に5カ国を駆け巡ることは、それぞれ充分の時間を取っている筈なのに、やはり相当の苦行であったと言うのが、本音の感想である。特にパリを除いて、4ヶ国は大きな共通項、神聖ローマ帝国の主要部と言う特徴を持っているとなれば、どの町へ行っても同じような構えであり、同じ様なものを持っているのは不思議でないといえる。そのそれぞれには微妙な差があるとしても、素人には判り難いのではなからうか。私としては、事前の勉強が足りなかった故で、その場所では強い印象を受けた筈のものが、後半になる頃からは全く混乱してしまったようである。一体何処を廻ってきたのか、何処で何を見たのか、あれを見たのは何処だったのか、さっぱり思い出せなくなっていた。従って私としても最も印象に残ったことを書いて見るより方法がなくなっている。

先ず最初の出会いで、最高の感激はベルガモン博物館だった。昔読んだ建築史の本で(1956年版)、発掘後一ベルリンで復元されたが、現在は不明である一と書かれているベルガモンの遺跡がその壮麗な姿の全貌を見せていた。しかしパンフレットで戦禍によって完全に破壊されてしまっている写真を見ると、よくもここまで復元したものだと感心せざるを得なかった。イオニアの華麗な大神殿とその精緻なギリシャ彫刻は、時間の制約無しにもう一度見に来たいものと思わせた。イシュタルの門は拾い物だった。此処でお目にかかるとは、この門の先に続く「行列大路に沿って世界の七不思議といわれる空中庭園やバベルの塔がいかに壮麗な姿を見せていたかを偲ばせるに十分であった。これに対して全く対照的な姿をドレスデンの街で見なければならなかった。一つは、ツヴィンガー宮殿の公害によると見られる汚れ振りである。素材が砂岩であることも原因かも知れないけれど屋上の彫刻が真っ黒に変色している有様は残念としか言えない。一部足場をかけて修理をしてはいたけれど、残りの部分は修理の順番が来るまで待っていてくれるだろうか。もう一つはフラウエンキルヘである。このプロテスタントの教会はツヴィンガーの完成に近い頃から工事が始まり、集中形式のバロック建築として、ペロットのドレスデン風景では、常に中心部分を占めて描かれているドレスデンの名建築であるが、第二次大戦中、例のドレスデン無差別爆撃によって破壊され、わずかに二つの隅の部分のみが無残な姿をさらしている。広島原爆ドームは原形を留めているが、このかつては5千人を収容し

た華麗な名建築は、ドレスデン美術館のペロットの画か、写真で確かめるより方法は残されていない。



もう一つ、ブダペストでは、驚いたこと、感心したこと、意外であったことなどの連続であったが、中でも宿泊したグランドホテル・ハンガリアのロビーの壁がそれ自体巨大な陶板の造形であり、その題材に選ばれていたのは大きな紙飛行機だったこと。国際ホテルとは言うものの、まだそれ程余裕のある国とは思っていなかった国で、この建築装飾の考え方には脱帽するだけであった。



東欧の風景と美術館めぐりの 旅に参加して

池 崎 葉奈子



東欧も美術館めぐりも初めて、と言う期待と不安が、少し絡んでの参加であった。

西ベルリンの其処に着いたのは10月20日、夕方近い小雨の中であった。バスの中から花柄のように見えたのは、側でみたら文字であった。赤や黄のペンキで埋まった壁に目を這わせていたら、刺すような痛みが伝わって来た。「この壁は帰国一週間後、変革の嵐に崩壊した」

でもこんな気分も次々とこなす観光と見学で一掃した。気温も14.5度と、旅の間あまり大差なくとても快適であった。でも私は、初めの見学館ベルガモン博物館の豪華な装飾と膨大な彫刻などに圧倒され、心が舞い上がってしまった。これはこのあとの美術館や宮殿でも同じで、ひたすら感動感動で何かを掬いあげて鑑賞する、と言う事は迎も出来なかった。それでも資料から、ドレスデンのツヴィンガー宮殿にはどうしても見たいと思う絵があった。ラッアエロの「システーナのマドンナ」であった。それを巨匠たちの名作「15～18世紀」だけの絵画の中で見ることが出来た。感激であった。

市内観光でもドレスデンは調和のとれた美しい街であった。時の為政者「18世紀」アウグスト侯の卓越した慧眼が、今もしっかりと建造様式などに息づいている事に感動した。又、アウグスト通りのマイセン陶器細工の壁画「君主の行列」も目をみはる素晴らしいものであった。百米を超える長さの君主の絵に、それぞれの来歴が偲ばれ感動した。千年の歴史があると言うプラハは、尖塔なども多く見られ風格のある街であった。観光の一つカレル橋にもどっしりとした貫禄が見られた。プラハの一夜、私達はオペラ観賞に楽しい一時を過ごすことが出来た。

豪壮なプラハ城に隣接して建っている、国立絵画館では何かホッとした気持ちになれた。ピカソ・ルソー・ルノワール・ユトリロと言った画家の名が、私の僅かな既成知識と符合出来たからかも知れない。

ウィーン美術館では膨大なコレクションに、その豪華さに言葉もなかった。シェーンブルン宮殿の大ギャラリーのフレスコ画、百万グルデンの部屋・ローサの大部屋・マリア・テレジアの等身大の肖像画などは、誰でも魅了されてしまうのではなからうか。

ブダペスト美術館では一つ心にしみる絵があった。グレコの「橄欖山の祈り」であった。この場面の奥から何か聞こえたのは、私の空耳であったらうか。

私の持ち歩いたメモ帳には、感激・感動・素晴らしい・の文字だけが日付けと並んで書きこまれてあった。本当に素晴らしい買物をした旅であった。

心優しい素敵な御一諸の皆様、有り難う御座居ました。



新 入 会 員 紹 介 (平成元年9月 ~ 平成2年2月)

◇法 人 会 員 (3社)

加 入 月	法 人 名	住 所
1. 10	(株)北翔クレイン	札幌市中央区北5条西6丁目 1-23 第2北海道通信ビル7F
1. 10	(有)大門商会	札幌市白石区南郷通南17丁目 南4の22
2. 1	(株)エンバイアー	札幌市北区北23条西5丁目 18番地

◇個 人 会 員 (75名)

加 入 月	氏 名	住 所
1. 9	松谷 成司	札幌市西区前田5条10丁目2-1
1. 9	早瀬 靖子	“ 中央区北1条西15丁目 大通ハイム912
1. 9	米田 玲子	“ 中央区南13条西17丁目
1. 9	佐々木ヨシミ	“ 中央区大通西15丁目 ライオンズMS大通405
1. 9	南 孝輔	足寄郡足寄町南6条3丁目
1. 9	藤原 邦子	札幌市豊平区北野2条1丁目 13-5
1. 9	金阪喜志子	“ 東区北31条東18丁目5-10
1. 9	高崎千鶴子	“ 中央区南3条西12丁目 ダイアパレス南3条401号
1. 9	伊藤 和子	“ 豊平区平岸2条7丁目 2-20-903
1. 9	松田 節子	“ 豊平区平岸3条13丁目 1-24
1. 9	森 光夫	岩見沢市7条西3丁目 富荘
1. 9	橋本 洋一	札幌市中央区北7条西14丁目 28-23
1. 9	相馬 久子	“ 南区真駒内緑町2丁目 13-2-402
1. 10	時田ひとみ	“ 西区二十四軒2条4丁目 日商岩井琴似MS306号
1. 10	渡部 圭太	“ 豊平区平岸6条13丁目 2-11
1. 10	内山 秀子	“ 西区福井2丁目10-9
1. 10	保科 俊夫	苫小牧市王子町3丁目4 1-202

加 入 月	氏 名	住 所
1. 10	寿田 汀子	札幌市西区西野4条1丁目7-5
1. 10	福田 ヨキ	小樽市清水町24-2
1. 10	小林美津子	札幌市西区山の手4条2丁目 1-46-611
1. 10	佐藤 友公	“ 豊平区平岸4条14丁目 平岸グランドハイツ301号
1. 10	牧田 章	“ 北区屯田3条4丁目1-12
1. 10	上田 和子	“ 豊平区北野7条3丁目 8-22
1. 10	大長由佳子	“ 豊平区清田8条3丁目 2-30
1. 10	一柳 淳子	“ 東区北7条東4丁目
1. 10	堤 加奈子	“ 北区北31条西11丁目 1-2-407
1. 10	熊谷 邦子	室蘭市高砂町2丁目19-1
1. 10	酒井 陽子	札幌市北区北21条西13丁目 公宿512-34
1. 10	野村 聖子	“ 中央区北1条西18丁目 アートサイドテラス705
1. 10	舟根 栄子	“ 西区八軒5条西10丁目 1-47-517
1. 10	土肥 信子	“ 東区伏古2-5 1-31
1. 10	木種 良子	“ 北区西沢戸7条1丁目 20番地190
1. 10	新川 新子	“ 東区北16条東1丁目 第3ファミリー612
1. 10	斉藤 澄雄	“ 南区澄川1条3丁目2-30
1. 10	田口リツ子	“ 中央区南14条西6丁目 5-16-401
1. 11	真田由美子	“ 豊平区西岡5条2丁目 5-10
1. 11	隠岐 良子	“ 中央区北1条西15丁目 大通ハイム905
1. 11	島 蓉子	“ 中央区北2条西21丁目 円山北2条パークMS301
1. 11	山下 正徳	“ 北区麻生町1丁目3-28
1. 11	前田 幸夫	岩見沢市日の出北1丁目9-20
1. 11	樋口 恵美	札幌市南区定山溪温泉東4 定山溪小学校内
1. 11	青山 康	“ 北区新川3条12丁目1-18

加入年 月	氏名	住所
1. 11	山下 博	札幌市南区真駒内上町2丁目 10-4
1. 11	犬飼 好清	“ 手稲区西宮の沢5条1丁目 352-33
1. 11	鹿野 昭一	“ 中央区双子山1-6-16
1. 11	石井 弘子	俱知安町北6条東3丁目
1. 12	加藤 静子	札幌市中央区南3条西8丁目
1. 12	林 姫子	“ 中央区宮の森1条5丁目 1-16
1. 12	升田 昇一	“ 西区西野9条6丁目4-1
1. 12	原 省三	小樽市稲穂4-10-20 セントラルビル403
1. 12	大宝 洋子	
1. 12	小野寺ミツ子	札幌市東区北16条東6丁目 2-9 A-602
1. 12	中村 光雄	“ 中央区北1条西24丁目 エパーグリーン円山302
1. 12	駒口 友子	函館市日吉町1丁目27-7
1. 12	山本 秀樹	札幌市手稲区曙4条2丁目8-10
1. 12	坂谷 敬子	“ 中央区南19条西14丁目
1. 12	熊谷 猛伸	“ 西区西野6条8丁目5-8
1. 12	土谷 二郎	上磯町飯生2-6-10
1. 12	土谷 雅子	函館市榎本町15-19
2. 1	日下 幸久	札幌市厚別区厚別中央2条6丁目 6-10-308

加入年 月	氏名	住所
2. 1	三井 一彦	札幌市中央区北5条西20丁目
2. 1	計良 英子	“ 中央区南4条東1丁目6
2. 1	福嶋美どり	“ 中央区北4条西12丁目 ダイヤパレス植物園402号
2. 1	寺島 悦子	江別市大麻元町168-34
2. 1	澤谷 雄幸	札幌市白石区北郷2条4丁目 7-1
2. 1	岩谷 幸雄	“ 中央区大通西18丁目北向 サッポロステンドグラス
2. 1	宮田 志織	“ 中央区南18条西13丁目
2. 2	丸山 淳士	“ 中央区南2条西28丁目 174番地
2. 2	吉田 道子	“ 豊平区里塚945
2. 2	竹谷 泰子	“ 白石区菊水3条5丁目 2-5-105
2. 2	松本 洋子	“ 厚別区厚別南5-2-15
2. 2	梶浦 利也	江別市東野幌59-2 キャスル松崎No.1201号
2. 2	坂本 フジ	喜茂別町字中里392
2. 2	飯田 淑子	札幌市中央区南15条西14丁目 3-1
2. 2	田川 公子	“ 手稲区前田5条15丁目 8-24

北海道立近代美術館

平成2年度の展覧会事業を紹介します。

当館では、作品の収集活動と連動させながら、所蔵品を有効に紹介するため「常設展」の展示に積極的に取り組んできました。これまでも各回ごとにテーマ性を持たせて年間5回の展示替えを行ってきましたが、「常設展」という名称からくる固定観念のためか、かなり美術館に足を運んでいる人でさえ、一度見れば常設展示室に入らない人が少なくないようです。そこで、もっと所蔵品に親しんでもらおうと新年度からは装いも新たに、名称を「これくしょん・ぎやらい」として、各期ごとに大きな切り口で所蔵品を総合的に展示してゆく予定です。

第1期(4月1日～5月13日)では、「静物画の詩情」と平成元年度に新たに収集された作品を紹介する「新収蔵品展」が開かれます。新収蔵のおもな作品としては、オブティカル・アートを代表するヴァザルリ、アヌスキウィッツの作品、ラリックのガラス作品、世界の気鋭若手作家による現代ガラスなどがあげられるでしょう。第2期(5月18日～9月5日)では、「モンパルナスの丘—画家たちの青春」と題して、バスキンを中心としたエコール・ド・パリの作家の作品を全室使って大々的に紹介します。第3期(9月9日～10月21日)では、多様化する版画表現に視点を当てた「現代版画—拡大する版の表現」、第4期(10月25日～12月22日)には、北海道とアルバータ州の姉妹提携10周年を記念して、アルバータの80年に及ぶ風景画の流れをたどる作品展「Spaces & Places」が開催される予定です。第5期(1月5日～3月31日)には北海道の美術の歩みを見直す「昭和の北海道美術—自立への展開」を開催いたします。

さて、平成2年度の特別展の最初は、滋賀県立近代美術館所蔵品による「近代日本画の美」展(4月13日～5月13日)が開かれます。明治になって新しい日本画の確立に情熱を燃やした横山大観や菱田春草をはじめとして、伝統をふまえながらそれぞれ個性的で清新な近代的画風を築いた速水御舟や小林古径、安田靉彦、小倉遊亀など、



クラムスコイ「見知らぬ女」1883
(「19世紀ロシア絵画展」)

28作家、52点の秀作を紹介します。

現代イタリア具象彫刻を代表する巨匠を紹介する「ファッツィーニ展」(5月19日～6月17日)は、日本ではじめての本格的な回顧展であり、新鮮な感動を呼び起こすことでしょう。

続く「幻想のプリズム」展(6月23日～7月22日)では、当館が17年を費やして収集してきたガラス・コレクションを広く紹介するため、200点の作品を

選んで多様なガラス芸術の魅力に触れてもらいます。この機会にかねてから要望の多かったガラス・コレクションのカタログも制作する予定です。

夏には、民主主義を標榜して激しく揺れた帝政末期のロシアの、ヒューマニズムの精神に満ちたリアリズム絵画を系統的に紹介する「19世紀ロシア絵画展」(7月28日～9月5日)が開催されます。ロシア美術の宝庫といわれるモスクワのトレチャコフ美術館とレニングラードのロシア美術館から、油彩、素描の作品91点が出品されます。また、毎年恒例の子ども向けの企画、「サマー・ミュージアム'90」(7月28日～8月12日)も同時に開催されます。

初秋にはいと、「ワイエス展—ヘルガ」が始まります(9月12日～10月21日)。克明な描写と爽やかな透明感によってアメリカの自然と人間を描写して日本でもきわめて人気の高いワイエスですが、本展は、自宅近くの農場で働くドイツ系の女性ヘルガを15年間にわたって描き続けた話題のシリーズです。深い人間賛美の精神に裏付けられたワイエス芸術はあらためて大きな反響を呼ぶものと思われま

さて、隔年ごとに開催されることになった「北海道・今日の美術」展の第2回目は、軽快でやわらかな色彩と造形感覚を示す本道ゆかりの作家たちをとりあげ、北海道美術の今日的な動向を探ります(11月9日～12月22日)。そして、正月の「子どもと親の美術館'91」(1月5日～1月27日)で当館の企画展は締めくくられますが、その後貸館事業として、プーシキン美術館所蔵の名品を紹介する「ヨーロッパ絵画500年」(2月3日～3月17日)が開催されるのも楽しみなところ



安田靉彦「飛鳥の春の額田王」1964
(「近代日本画の美」)

北海道立旭川美術館

北海道立旭川美術館の平成2年度の展覧会事業をご案内いたします。

「所蔵名品展 伝統の美—木と陶—」（4月3日(日)～5月13日(日)）

平成元年度に当館が収蔵した山口正城、木原康行などの抽象絵画や須田桑翠の黒柿小箆笥など伝統木工芸の作品にあわせて陶芸のすぐれた作品を紹介します。

「ヨーロッパ版画名品展（仮）」（5月19日(土)～6月24日(日)）

ルネサンス以降ヨーロッパでは銅版画やエッチング、リトグラフなど新しい版画の技法が次々と開発され、版画独自の表現が様々な画家、版画家たちによって追求されてきました。北海道立近代美術館の西欧版画コレクションのなかからデューラーやブレイクからシャガール、ダリにいたる今世紀の作家まで約20作家およそ100点によってヨーロッパ版画の魅力を紹介いたします。

「竹久夢二展」（7月30日(土)～8月12日(日)）

竹久夢二（1884—1934）は明治末から昭和にかけて、その抒情的な作品によって多くの人々に愛された画家です。ながく美術史の枠外にありましたが、近年画家としての業績が改めて注目を浴びるようになってきました。

本展は夢二作品の収集家として名高い川村幸次郎のコレクションから日本画、油彩、水彩など約200点が出品されるものです。

「旭川開基100年記念 ユトリロとモンマルトルの画家たち」（8月18日(土)～9月24日(日)）

パリのモンマルトル界隈には、19世紀末から20世紀前半にかけて、様々な国から若い芸術家たちが集い、フランス近代絵画史上最も創造的な一時期を画しました。本展は、このモンマルトルに生まれ育ち、この街を描いた



ユトリロ モンマルトル ムーラン・ド・ラ・ギャレット



ユトリロとその母ヴァラドンを中心にすえ、ピカソ、ロートレック、キスリングなどモンマルトルゆかりの画家たちの作品を紹介します。

「旭川開基100年記念 近代彫刻の流れ—西洋と日本—」（9月29日(土)～11月4日(日)）

近代彫刻はロダンの出現によって幕が開き、その後キュビズムや構成主義の運動とともに新しい彫刻の流れが形成されていきました。日本においてもロダンの作品に啓発された荻原守衛以降、多くの彫刻家たちが西洋近代彫刻の影響を受け、それぞれの彫刻造形を築いています。本展は、西洋と日本の近代彫刻史に大きな足跡を残した主要な彫刻家約40名をとりあげ、近代彫刻の流れを紹介しようとするものです。

「木のニューウェーブ（仮）」（11月10日(土)～12月22日(日)）

現代美術では、木を素材とした重要な作品が次々と発表され、今までの木彫には見られない新しい木の資質を積極的に取り上げた多様な表現が試みられています。本展では戸谷成雄、舟越桂、深井隆など今、世界的な活躍をしている現代作家の近作を紹介します。

「所蔵品展 旭川の絵画」（1月5日(土)～2月17日(日)）

旭川画壇は大正期のヌタクカムシュッペ画会の創設に始まり、現在も活発な活動が展開されています。本展は当館の所蔵品を中心としながら、草創期から活躍してきた高橋北修や朝倉力男、戦後の画壇を担った佐藤進、山口信太郎、さらには北海道アンデパンダンの作家などの動向も含めながら旭川画壇の流れを紹介します。

「北海道・今日の美術」（2月23日(土)～3月24日(日)）

道内在住の若手を中心に、本道ゆかりの道外在住者の新作、近作によって現代美術に顕著な傾向を取り上げます。

以上、当館の今年度開催予定の展覧会を紹介しました。多数の皆様のご来館をお待ちしております。

北海道立函館美術館

当館では、平成2年度も充実した展覧会を企画している。多くの方々が気軽に美術と触れあっていただけるよう、どの展覧会も趣向を凝らしているが、なかでも5月26日(土)から約1か月間、開催する「18世紀宮廷芸術の華 フランス・ロココ」展は、春季特別企画として力をいれている展覧会である。これまで日本・西洋の近代から現代の美術を中心にさまざまな展覧会を開催してきたが、やはり一番関心があつまるのはフランス絵画らしい。そうした人気を考えると、「フランス・ロココ展」は、期待できそうである。出品作品は、現在アメリカ国内に所蔵されているブーシェ、フラゴナールといった18世紀のフランス絵画の巨匠の代表作に、ヴェルサイユ宮の装飾や宮廷風俗画で活躍したランクレの作品を加えた約90点。フランスが最も優美に華やいだロココ芸術の粋を、あますところなくご紹介する。日本初公開の作品も数多く、また函館で印象派以前のフランス絵画が紹介されるのは初めてとなる。

そしてこのあと、7月1日(日)からは「オリエンタリズムの絵画と写真」が始まる。「オリエンタリズム」とは、ヨーロッパからみたオリエント(東方)への関心や趣味をさし、トルコ、アラブなどのイスラム文化圏を対象にした東方趣味を意味する。祈りの場景、アラブの騎士たち、広大な砂漠を行く隊商、オダリスクなど、遠い異国のイメージは、ロマンティズムとエキゾティシズムをかきたたせ、19世紀のフランスの画家たちを中心に今世紀の初頭までオリエンタリズムの絵画が盛んに描かれた。この展覧会では、神秘的でエキゾチックな19世紀フランスの絵画と写真に、現代日本の写真家14名の眼がとらえたオリエント世界の写真もあわせて展覧する。

こうした海外美術の展覧会とともに、日本の近代美術を新たな切り口で紹介するのが夏から秋にかけての展覧会である。

まず、8月12日(日)から9月16日(日)まで開催する「棟方志功と津軽の美」。これは、青函トンネルの開通を記念して青森市と函館市がツインシティとなり、新たな文化交流の時代が幕開けしたことに協賛して企画したものである。青森が生んだ巨匠・棟方志功の作品と、津軽の美しく厳しい自然と歴史を背景に、人々の暮らしのなかから生み出された力強い美の造形を紹介するもので、そこに豪快でありながら暖かい津軽のこころを感じとっていただければと思う。棟方志功の代表作「東北経鬼門譜」「釈迦十大弟子」をはじめ、ねぶた、ねぶた、津軽凧絵、こぎん刺し、津軽塗りなどの津軽の味わい深い民芸品を一堂に展示する。

この展覧会に続いて、現在準備をすすめているのが、秋季特別企画の「形象のモダニズム 1930~40'S」である。東京・練馬区立美術館との共同企画によるもので、1936年の新制作派協会の結成前後に見られる多様な具象表現の動向を再検討し、戦後日本の具象絵画の原点を探



フランス・ロコフ展
フラゴナール「逃げるふりして」

る。出品は、岡田謙三、猪熊弦一郎、海老原喜之助、松本峻介ら18作家、約70点。昭和初期に新鮮な具象表現の展開を見せた若き画家たちの活躍にスポットをあてる。

さて、函館美術館では、道南にゆかりある作家の回顧展を昭和62年、63年と開催してきたが、ここで紹介した岩船修三氏、橋本三郎氏が、昨年相次いで他界した。両氏は戦争で中断した函館の美術活動を再興したメンバーであり、函館の洋画壇で果たした役割は大きかった。何らかの形で両氏の影響をうけ、油彩画家として活躍している作家も多い。4月7日(土)から5月20日(日)まで開催する「三箇三郎・木村訓丈・瀬戸英樹三人展」で紹介する3人の作家は、函館を拠点に活動している中堅の油彩画家であり、三箇三郎は、田辺三重松に師事し、木村訓丈、瀬戸英樹は、それぞれ橋本三郎、岩船修三に師事したという経歴をもつ。いずれも全道展や行動展、国画会、新制作などで活発な制作活動を行い、注目を集めている作家たちである。三作家の代表作、約60点によって函館の美術活動の一端をご覧いただく。この「三人展」のほか、北海道を拠点に活躍中の若手作家を取り上げるビエンナーレ展「北海道・今日の美術」(道立美術館3館の共同企画)を年明けの1月6日(日)から2月10日(日)まで開催する。そのほか、11月3日(土)から12月9日(日)まで「現代書の源流展」、平成3年の2月17日(日)から3月24日(日)に「日本画名品展」などを開催する。特に「現代書の源流展」では、現代書の父・比田井天来と、その門下でいずれも現代書の代表的書家となった上田桑鳩、金子鳴亭、手島右卿らの作品を展示し、近代から現代書への流れを追う。

今年度も、函館美術館が生涯教育の場として楽しくご利用していただくよう、皆様のご来館を心からお待ちしております。

北海道立三岸好太郎美術館

「私は建築家になるべきでしたね。建築は絵画なんかより先進的です。」(三岸好太郎)

夏の特別展示「バウハウスへの想いーデザインからアトリエまでー」(6/1~7/22)では、晩年の三岸に大きな影響をあたえたドイツの造形教育研究機関バウハウスに焦点をあてます。

1933年、それまでの作風から大きく転換して前衛風の作品を次々と発表した三岸は、前年バウハウスから帰ったばかりの建築家山脇巖と意気投合、翌年からアトリエ造りにとりかかります。また山脇とその夫人道子がバウハウスで学んできたデザインや手法を自分でも試み、いくつかの魅力的な作品と習作を残しています。

今回の企画は、三岸好太郎が山脇夫妻らを通して想いを馳せたバウハウスの姿を、夫妻の作品や建築デザインなどとともに浮かび上がらせようとするものです。巖の未公開のコラージュ作品、道子の大きなタピスリー(帝展出品作)、そしてコンピュータ・グラフィックス(CG)による三岸のアトリエの再現も試みる予定です。

「白いココ風の馬車が二馬路の角を通る…」

秋の特別展示「上海の絵本ー中国モダン都市の詩ー」(10/5~11/25)は、三岸の上海旅行をとりあげます。「霧に包まれた上海の街、十米も先はわからない様なモヤ、灰色の雲の中をフハリフハリと行く人、……」三岸好太郎の散文詩『上海の絵本』は、こんなふうに始まります。彼が詩人としても非凡な才能を持っていたことがこの詩からもわかります。上海とその周辺は三岸が踏んだ唯一の異国の地です。

三岸がそこで見たものは、ヨーロッパ的な街並みであ



三岸好太郎 上海風景 1926



三岸好太郎「飛行船と人物」1933年頃(コラージュ)

り、毎夜繰り広げられる舞踏会やジャズの演奏やサーカスの興奮であり、妖しい魅力をふりまく姑娘(クレーン)たちの姿でした。

会場では、三岸の《上海風景》《中国婦人群像》などに加え、当時の上海を描いた他作家の作品、また三岸とともに上海を訪れた岡田七蔵の作品(初公開)などを展示するほか、モダンな国際都市上海のイメージをつたえるさまざまな資料を紹介します。会期中、コンサートも計画しています。

お面をつくろうーたんけん美術館

好評の夏休み小中学生向け企画「たんけん美術館」は、常設展示の中でワークシートによって絵がしやくイズに挑戦してもらうものです。今年にはさらに紙粘土でお面やマリオンネットをつくるワークショップも開催します。

いつ見ても新しいーいつ来ても心がやすらぐ

常設展示は年間6期に分けて、それぞれテーマを持たせてご覧いただく予定です。好評の美術館コンサートに加えて、ミニ・リサイタルも計画中。平成二年度もぜひ三岸美術館で「心の日曜日」をお過ごし下さい。

この美術館には、いい気持ちがあると思います。ニューヨークのは、ふつう、人でいっぱいでも何か感じません。でもソーホーでは、この所のような気持ちがあります。ちょうちょうの絵は、気に入りました。…エミリ、アン、メイ(Brooklyn, New York)

財団法人札幌彫刻美術館

昭和56年6月にオープン以来、広く彫刻作品の紹介につとめてきた当館も、平成2年度10年目を迎えようとしています。生涯モニュメンタルな彫刻作品を制作し続けた札幌出身の彫刻家故本郷新の彫刻作品が収蔵の大半を占める当館では、特別展期間中以外は彫刻約400点、絵画約300点の中からテーマごとに常設展を前期・後期にわけ、展示替を行っています。

平成2年度前期の常設展（4月～10月）は、次のような内容を予定しています。

本館では、本郷新の初期の作品、主に1930～50年代の作品を展示します。本郷新が、東京高等工芸学校を1928年に卒業の時「国画創作協会」に彫刻部が創設されたのを機に『少女の首』を出品、初入選しています。今回は、この『少女の首』とともに、これまで展示する機会がなかった作品を多数展示する予定です。まさに、彫刻家本郷新の神髄にせまる作品群の初公開となります。

記念館におきましては、これまで通り全国に野外設置されています。札幌市大通公園の「泉の像」や、釧路市幣舞橋の「冬の像」などのモニュマンの石膏原型の展示のほかには2階では、レリーフ・陶板展を開催します。本郷新は、ブロンズ作品でも『馬と少年』と題した作品を数点制作していますが、レリーフにも『馬と少年』をテーマとして制作しています。馬と少年の様々なふれあいを温かいまなざしで表現したレリーフは、ほのぼのとした情感にあふれています。レリーフ・陶板展は、裸婦や頭像とはまた違った本郷新の一面をうかがうことの出来る内容となるでしょう。

平成2年度後期（11月～3月）常設展は、本郷新の1960～70年代の作品を中心に展示する予定です。1960年代以降、本郷新の作品はモニュマン制作が主流となってきました。そのほかには、小樽の春香山にアトリエを構え制作したテラコッタの作品や、「鳥を抱く女」シリーズ、「無辜の民」シリーズと、作家の旺盛な創作欲は次々と制作し発表していききました。平成2年度1年間の常設展を通し、本郷新の彫刻家としての軌跡を、初公開作品をまじえながら紹介していきます。

特別展は、「第5回北の彫刻展」を8月29日（水）～10月14日（日）まで開催を予定しています。「北の彫刻展」は、現在活躍中の北海道在住の彫刻家を紹介する内



本館展示室(常設展)

容で当館開館以来隔年で開催しています。この彫刻展は、所属や表現方法——具象・抽象、素材の別にとらわれない作家の自由な発想で制作された作品を2年に1度発表してもらおう試みで企画されてきました。今年で5回目、10年になりました。公募展や、個展などではなかなか同じ会場に会することの少ない彫刻群は、今年のはたしてどのようなハーモニーを宮の森のこのスペースで奏でることになるのでしょうか。同時に、1回目から数えて10年ということで、作家1人1人の作品の変遷過程の上からも興味深い内容となるでしょう。昨年は、第4回本郷新賞に道内作家國松明日香制作の「はまなす国体」シンボルモニュマン『捷』受賞という朗報はありましたが、本田明二、砂澤ビッキという2人の重鎮を失った道内彫刻界であるだけに、「北の彫刻展」出品者への期待は一層大きいものとなりそうです。

友の会との共催事業は、慣例の彫刻めぐりを今年も開催します。内容は、札幌市内及び2月13日の「石狩彫刻めぐり」の他に、道外として秋には岡山方面への彫刻めぐりも予定しています。今回は、収蔵作品の豊富な大原美術館や、彫刻家平橋田中の井原市立田中美術館の見学などもりだくさんの秋の見学会となりそうです。

事務局だより

◆ 「婦人美術講座」開講のお知らせ

平成2年度の「婦人美術講座」を4月28日から10月20日までの間に、毎週土曜日の午前10時15分から12時まで20回開講いたします。

この講座は、当協会の会員で北海道立近代美術館を活動の場とした、「ボランティア養成」を目的としております。女性会員の方及び友人、知人で参加ご希望者は、「平成2年度婦人美術講座開催要項」をお送りしますので、協会事務局へお申してください。

◆ 美術研修旅行のお知らせ

去る2月16日に開催された事業部会（鈴木英二部長）で、平成2年度の事業計画について、協議され美術研修旅行について、国内旅行は関西方面に決定し、海外はイタリアを主体に継続して検討することになりました。

①国内は第7回として、5月18日から21日までの3泊4日の日程で、国際花と緑の博覧会に併せ、関西地方を訪ねることになりました。

見学予定として、京都国立近代美術館、堂本美術館、京都国立博物館、国立国際美術館（または国立民族学博物館）、花の万博などを計画しております。

②海外旅行は、長年イタリアのローマ日本文化会館館長兼イタリア公使として務めておられた、北海道立近代美術館の井関館長さんに、これからアドバイスをいただき、イタリア国内の美術館巡りを検討していきます。

◆ 会費納入と退会の届け出についてお願い

会員の皆さん方のご協力とご努力により、平成元年度新たに入会された方は、220名（2月末現在）で会員総数は1,300名となり、美術を愛好し協会に対する理解者が、増えております。一方会員の特典である会員証を利用される会員も年々増加し、この分協会が美術館に支払う入館料も本年度は、4,200,000円を超えそうです。

社団法人である北海道美術館協会は、会員の会費で運営されております、会費は早めに納入していただき、都合で退会される方は必ず文書（官製はがきで結構です）で届け出をしてください。

◆ 新商品オリジナルトート販売のお知らせ

ナイク・サタムさん（インドの染織デザイナー）が音威子府村で、直接指導された「マー・プリント」工房が当協会のために創作してくださった、丈夫で使いやすい袋です。ご愛用いただければ幸いです。

品番	形	サイズ /cm	値段
1	ポケット付	縦36×横33×幅9	2,800円
2	手提げ	縦36×横33×幅9	2,500円
3	きんちゃく	縦31×横25	1,700円
材質	厚地木綿(キャンバス地)/シルク・スクリーンプリント		



地方発送もいたします。消費税・送料は、別にいただきます。

ご希望の方は当協会事務局へお問い合わせください。

TEL (011) 644-4025

◆ 美術図書取扱のお知らせ

このたび、NHK<日本放送出版協会>発行の美術図書を道立近代美術館の売店で、販売することになりました。是非ご利用ください、地方発送もいたします。

① エルミタージュ美術館 [全4巻・別巻1]

② ルーブル美術館 [全7巻]

③ オルセー美術館 [全6巻] <第4巻4月第5巻5月第6巻6月に発行>

* 定価・送料等詳細は、事務局へ連絡してください。